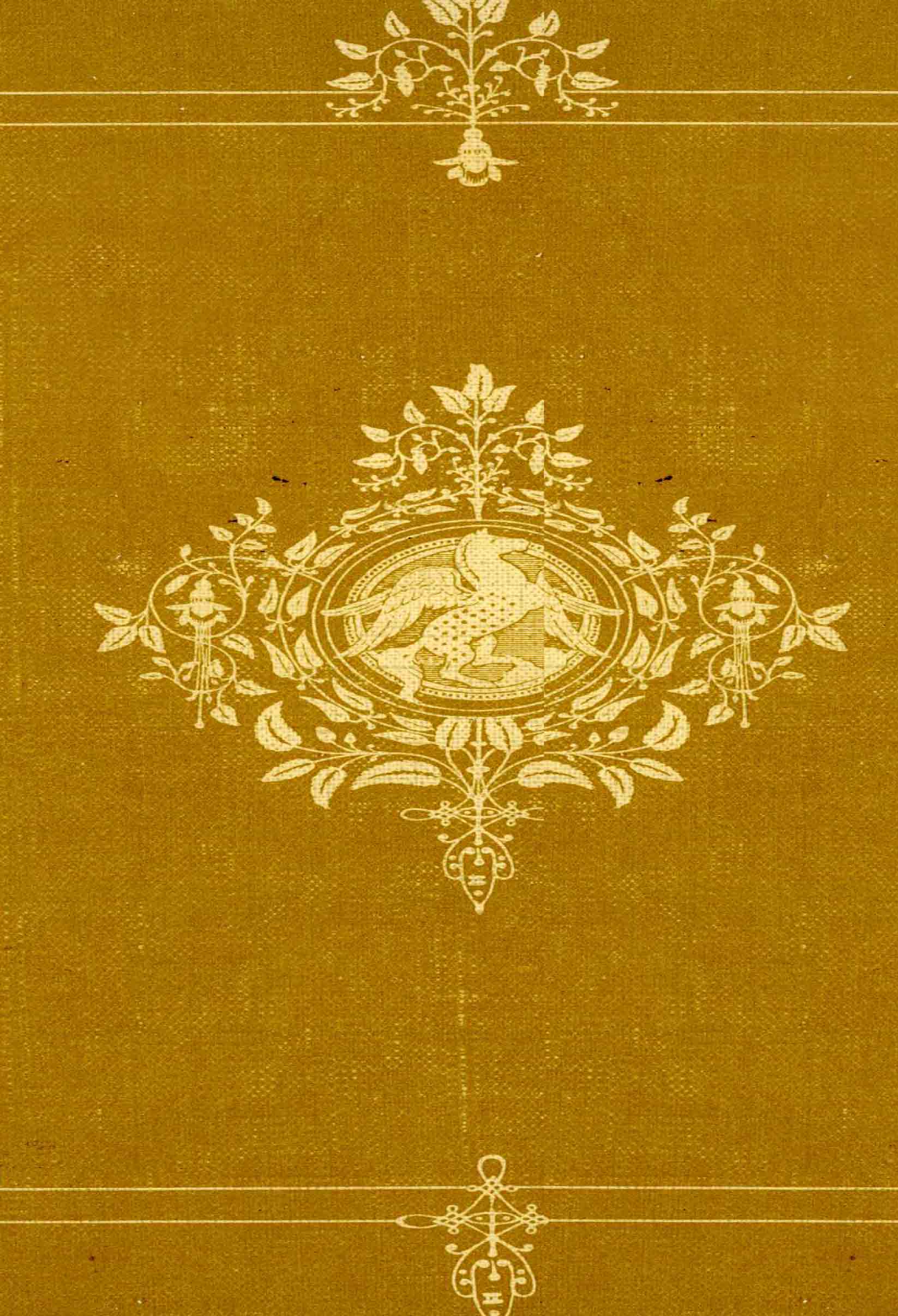

キリスト教文学の世界

17

パヴェーゼ
CESARE PAVESE

グァレスキ
GIOVANNI GUARESCHI

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉
森内俊雄　1936年生まれ。作家。
河島英昭　1933年生まれ。東京外国語大学教授。
田中小実昌　1925年生まれ。作家。
古賀弘人　1946年生まれ。イタリア文学研究家。
上総英郎　1931年生まれ。文芸評論家。
米川良夫　1931年生まれ。国学院大学助教授。

キリスト教文学の世界　17
パヴェーゼ　グァレスキ
パゾリーニ

昭和五十二年九月二十四日　第一刷発行

定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番
電話　東京（〇三）二九四―一一一一（大代表）

印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©SHUFUNOTOMO CO., LTD.　1997　Printed in Japan　0398―968457―3062

目次

パヴェーゼ
〈解説〉絶望と救済　森内俊雄　5
故郷　河島英昭訳　18
人と作品……河島英昭　326

グァレスキ
〈解説〉人間的でも困る　田中小実昌　97
ドン・カミロ　古賀弘人訳　109
人と作品……古賀弘人　329

パゾリーニ　上総英郎　221
〈解説〉病者の祈りとは何か　米川良夫訳　233
アッカットーネ
人と作品……米川良夫　332

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

パヴェーゼ

〈解説〉

絶望と救済

森内俊雄

この『故郷』という小説では、「ぼく」の眼を通して見られた六日間の出来事が描かれています。正確に言いますと、水曜日のお昼から翌週月曜日の午後までのことになります。これは小説の中で、作者がわざわざ断っているわけではありませんが、惨劇が日曜日の午後に起ったことを手がかりにしますと、こういうことになるのです。ベルトという名前を持つ「ぼく」がタリーノとともに水曜日に刑務所を出て、トリーノからブラの町を経て、タリーノの故郷モンティチェッロにゆく。そして、惨劇が日曜日の午後に起こりタリーノの妹ジゼッラが月曜日の朝に息を引きとるまで、小説は時間の自然的推移を追っています。つまりこの小説の時間は、冒頭の第一行、「門からぼくにつきまとってきた」から、小説の最終行「しかしぼくのことだけは、見落としていただろう」まで、私たちの日常の時間がそうであるように、直線的にすすむのです。したがって、読者である私たちはこの「ぼく」の眼を追って、時間の経過を素直に

辿ってゆけばよいように見えます。言いかえれば、「小説」という約束事によって、読者と「ぼく」には、時間の同時性があたえられているかのように見えます。

ところが、この小説を注意深く行を追って読んでゆきますと、実はこの「同時性」がさりげなく、しかし時にはいささか唐突な感じで拒否されていることに気が付きます。うっかり読み過ごしそうなのですが、まず小説が始って間もなくのところでぶっきらぼうに「いま思い出すと、ぼくも彼も刑務所を振り向かなかった」という一行があります。それから「ぼく」とタリーノがモンティチェッロに着いた翌日の記述のところにきて、「いまでもぼくは不思議に思っているのだが、あんな場所にほんとうに別荘があったのだろうか」とあります。そっと「いま」という時間、現在が挿入されています。こういった個所が、ほかにも幾つかありますが、この「いま」は小説の六日間――出来事の経過の外にある「いま」なのです。そして、さらにジゼッラの惨劇の描写に及んで、にわかに小説の「時」がはっきりしてきます。

「家では兎の肉と、ピーマンの煮物と、それにジゼッラがすくってあけてくれた、おいしそうなポレンタとが、ぼくらを待っていた。それを、たったいまのように、ぼくは覚えている。なぜならあの晩は、そのご、何かを料理するような余裕を、誰も持たなかったからだ」

「あの日の太陽は止まったみたいに動かなかった。地下の穴倉にいるみたいだった」

「もしも何も起こらなかったら、あの晩もぼくはジゼッラとあっていたにちがいない、そして彼女と仲直りをしていたにちがいない」

などといったふうにです。つまり、この小説は、性急な読者からは読み落とされかねないのですが、主人公「ぼく」によって、或る時点から回想されつつある過去の六日間の出来事を描いているのです。読者である私たちは、この「ぼく」の過去につきあわされているわけです。

では、この「ぼく」にとっての或る時点、「いま」とは、どんな時なのか、また「いま」という「時」の支点に立って振りかえられ眺められている過去によって、「ぼく」はどのように変貌をとげたのか、「ぼく」はどんな眼を獲得するにいたったか、などといったことは、この小説では一切触れられていません。そしてまたここには、神について、信仰について、あるいは人間の存在と行為をめぐってのむつかしい議論もありません。これは兄妹姦と殺人の物語です。風景と人物描写において、光と影のコントラストは非常に鮮かで、はなはだ象徴的ですが、ストーリーそのものは比較的単純です。読者は、この小説が何故『キリスト教文学の世界』に入れられたか、疑問を感じられるかも知れません。おまけに私たちは「ぼく」の現在につきあっているようでいながら、実は「ぼく」の過去につきあわされた上、むごたらしい惨劇とともにタリーノの故郷で放り出されるのです。それでは、この小説の題名になっている「故郷」とは、何を意味しているのでしょうか。主人公である「ぼく」が、私たち読者をはるばるモンティチェッロへ連れ出してゆく目的は何でしょうか。ところで、「ぼく」がジゼッラと交わす次のような会話があります。

『「ジゼッラ、きみの気持は変らないね?」ぼくは小さな声で彼女に言う。

『でも、あなたは、いつかトリーノに帰ってしまうわね』と、彼女は言った。『ここは、あなたの故郷ではないんですもの』

『きれいな娘がいれば、どこでもぼくの故郷だよ、安心していな』と言うと、彼女はいかにも幸せそうだった」

しかし、もちろんこれは「故郷」の本当の意味ではありません。この小説の作者パヴェーゼが見つめているのは、もっと別な意味での「故郷」なのです。

さて、この解説はそのパヴェーゼの「故郷」の本来の意味――と私が考えるところに辿りつくのが目的ですが、そのまえにもうすこしまわり道をしなければなりません。面倒ですが、しかし実はこのまわり道自体がすでに「故郷」の意味を理解する手がかり、ヒントであり答えのつもりでいるのです。

先に私はこの『故郷』という小説が、一種の変則的な回想小説のようなものだ、という意味のことを書きました。意図してあらわでありませんが、これは「ぼく」によって体験された過去の出来事の報告、物語です。普通、小説の書き手はこんなふうな書き方はしません。すくなくとも私の場合はそうです。出来事に最初からしっかりとした過去の枠組みを与え、それをかえりみている「ぼく」という人間の現在の状況、時点をはっきりさせます。過去を現在と対比させることで、過去はよりいきいきと立ち上ってくる、と考えるからです。常識的で、凡庸な方法論だと言われればそれまでですが、対比のさせ方にさまざまな工夫もあるわけで、私ならそうします。もっとも、この『故郷』のような一人称小説で、過去を何の註釈もほどこさず、そのまま投げ出したように書く方法も無いわけではありません。しかし、その場合はパヴェーゼのようなやり方で「いま」を挿入しないものです。不意討ちに「いま」を挿入することで、読者に突然の「過去」をつきつけたりはしないものです。

では、この『故郷』の作者が、何故こんな方法をとったのかと言いますと、作者には私たちが単に「過去」と呼んでいるものに対して、特別な理解の仕方、考え方があってのことだと思われるのです。パヴェーゼは、小説中の人物の過去に対して、異常な関心とこだわり方を示した作家です。いずれ読者がパヴェーゼの他の作品へと読みすすんでゆかれるならば、ただちに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

理解していただけることなのですが、その主人公たちの性格に一つの共通点があります。それは過去に対する彼等の激しい悔恨、痛みです。あらわれ方はさまざまですが、彼等は言わば過去、過ぎ去った時間の捕囚の人々です。過去への苦い認識、敗残、幻滅、後悔の眼が傷口のように、小説のどこかに必ず見開かれています。しかし、私が特異に思うのは、この意味においてではありません。彼等にとって、かつての自分と他人の行為への内省が問題であるのはもちろんですが、過去という時間そのものが、すでに威力ある棘なのだという意味で特異なのです。そして、いまわしい出来事や不幸な思い出ばかりに彼等の敗残、幻滅、後悔の眼が向けられているのではありません。たとえば、『浜辺』という小説の中に、次のような一節があります。

「私はわかりかけていた、かつて幸福にすごしていた場所ほど住みにくいところはないのだということを。なぜドーロがある日ふと汽車に乗って丘のなかへ帰ってゆき、翌朝、自分の運命のさなかへ戻ってきたのかを私は理解した」

この一節――ドーロに対する「私」の考えに、読者は私たち人類の遠い始祖に起った楽園追放の物語を重ねてお読みになっていいのだと思います。パヴェーゼにとって、「過去」とは、キリスト教で言う「罪」、より本質的な罪としての「原罪」ときわめて近い意味合いを持っていた、と言ってもいいのかも知れません。パヴェーゼの過去は、原罪感覚的な世界なのです。そして、その過去に向かう緊張の関係こそが、パヴェーゼにとっての「現在」だったわけです。「現在」という時は存在しません。それは常に過ぎ去る一瞬です。原罪の意味についての絶えざる想起が信仰の礎石であるように、パヴェーゼにとって「過去」とは、常に反復され継続しつつある「いま」なのです。『故郷』という「ぼく」の過去の物語のあちこちで、「いま」

が突然、楔のように打ちこまれているのは、おおよそこういった作者の考えを踏まえてのことだと思われます。そして、このことはいずれこの解説が辿りつく先でもう一度触れることになりますが、作者は『故郷』に描かれたモンティチェッロの日常世界が、ジゼッラの悲劇のあとでもなお変わりなく継続されるであろうことを暗示しているのです。しかし、いまここではこのことをおいて、まわり道をなおすこし先へと辿りたいと思います。

パヴェーゼの主人公たちに、もうひとつの共通点があります。『故郷』の中で、「ぼく」がピエレットの女、ミケーラに対して示す態度からもうかがえるように、彼等にはあらわであったりひそやかであったりする違いはありますが、ひとしく女性に対する不信と怨恨、復讐の感情を見てとることが出来ます。それは女性を主人公とした小説『美しい夏』などの場合においては、女性を見るに苛酷で痛切な作者の眼の色となってあらわれてくるようです。また長編『丘の上の家』では、主人公から男と女の愛についての次のような懐疑的な告白を聴かされます。

「エゴイズムの根を持たない愛、男や女を奴隷の状態に導かない愛なんか存在するだろうか」

それからパヴェーゼのすぐれた短編『自殺』――これはドストエフスキーにおける『地下生活者の手記』を思わせる作品ですが、その中にこんなきびしい一行があります。「あらゆる危険を冒して愛を受け入れるか、さもなければ売春行為があるのみだ」と――。

私はこの『自殺』という短編を、パヴェーゼの文学世界を考えるにあたって、欠くことの出来ないキー・ワードのようなものだと考えるのですが、その主人公「ぼく」もやはりみずからの過去にこだわり、女性に対する不信と怨恨、復讐の感情を抱いています。これはひとりの哀れな女を自殺へ追いこんでゆく青年の物語です。しかし、不思議なことに、彼はその女に自己の救済を見ているのです。

「カルロッタがぼくへの愛に苦しめば苦しむほど、過去のぼくの心の痛みは和らぎ、貧しいものに姿を変え、笑うべき世界のごとくに、少しずつ他人事になっていった。そして彼女から身を離せば、ぼくは無傷のまま、いっそう経験を積んだ自分を見出すのだった。彼女はぼくの汚れを拭きとる海綿だった。ぼくはしばしば彼女のことを思った」

これはカルロッタの名を、人間への愛ゆえに受難の道を歩んだイエスの名に置きかえれば、そのまま信仰告白となるべき文章ではないでしょうか。そして、この『自殺』における「ぼく」の女性観――不信と怨恨、復讐の感情と同時に救済を見る、言わば二重構造の女性観はまことに微妙なないまざり方をしながら、他の作品の中にもあらわれてくるのを見ることが出来ます。それは容易には読みとりがたいのですが、この『故郷』においても見られることなのです。「ぼく」とジゼッラの関係は、一見、牧歌的で始原的な愛のかたちへの郷愁と回帰に見えますが、ほんとうは酷薄な愛であって、平和な相貌のもとに、友人ピエレットの女、ミケーラに対してのように、女性に向きあう「ぼく」のひそかな不信と怨恨、復讐の感情が隠されています。自然的愛の本質は、男対女の争いとしての愛にしか過ぎません。ジゼッラの血は、「ぼく」が直接手を下したのではないにしても、その隠されたもの、男対女、自然的愛の挫折の結果に流されているのです。そして、救済は彼女の血におおわれて見えませんが、やはりここに用意されています。このことについても後で触れますが、こういった女性観の二重構造が、パヴェーゼの主人公たちの第二の共通点です。

加えて、いまひとつ、彼等に第三の共通点とも言うべきものがあります。それは傍観者としての性格です。彼等は葛藤からの逃亡者です。その典型的な例は長編『丘の上の家』の主人公「わたし」に見ることが出来ます。彼は動乱の時代にあって傍観者であり、戦火を逃れて自ら

の故郷を目指します。もっとも、それはグレアム・グリーンの小説を思わせるような、逃げることによって「私」を発見してゆく自己追跡としての逃走になってゆくものではあるのですが、彼が怯懦な逃亡者であることに変わりはありません。この「わたし」と『故郷』の「ぼく」とは、お互いに濃い血縁関係にあります。私が言っているところの意味はこうです。『丘の上の家』の「わたし」は教授で、『故郷』の「ぼく」は前科のある自動車修理工、機械屋さんであるに過ぎませんが、彼等はともに傍観者的な性格でつながっています。また「ぼく」はタリーノの誘いにずるずるとのせられた恰好で彼の故郷に行くのですが、これもひとつの逃亡だと考えられるのです。何故なら「ぼく」は「ピエレットがいなければ自分はひとりの失業者だった」のですし、そのすこし前には「トリーノの町なかでは枕を高くして眠れないんだ、刑務所を一歩出ればぼくを待ち伏せしているやつがいる」ともあります。つまり、「ぼく」は追われている食いつめ者です。こういった意味で、『丘の上の家』の「わたし」と「ぼく」は、作中人物の性格設定の上で互いによく似た兄弟だと言えるでしょう。

以上、パヴェーゼの小説において、主人公に共通する三つの性格を挙げてきましたが、特にこの傍観者的性格は『故郷』を理解する上で、大事な点です。

すでに読者はお気付きになったことと思いますが、『故郷』の「ぼく」は主人公でありながら、作中の他の人物たちとくらべてみますと、人物像としてはいささか生彩に欠けるのではないでしょうか。野卑で狡猾、臆病で他人の厄介者に過ぎないタリーノのほうが、躍如としています。彼の姉妹であるジゼッラやアデーレ、ミリオータにビーナ、彼等の父親であるヴィンヴェルラ老人とその孫、ナンド少年のほうが、はるかにいきいきとしています。リーコは、タリ

ーノによってグランジァ――農園の家を焼かれた男ですが、小説の中ではまったく姿を見せず、タリーノをおびやかす影の存在でしかありません。にもかかわらず、丘の上で廃墟となった彼の家の荒れたイメージと重なって、その不逞な風貌がありありと眼に浮かんでくるようです。では、どうして「ぼく」の人間像が生彩を欠くのかと言えば、それは「ぼく」の傍観者的性格のせいなのです。

タリーノが「ぼく」を故郷であるモンティチェッロに誘いこんできた魂胆は、自分の身を守ってもらいたかったからですが、小説の結末を見れば「ぼく」は彼のために何もしてやらなかった、と言っても言い過ぎではないでしょう。「ぼく」はタリーノの救いではありません。いや、救ってやる気など初めから毛頭もないのです。「ぼく」はジゼッラのことを考えながら、「これでタリーノさえいなければ優雅な田園生活だ」と呟くような人間なのです。もちろん、タリーノはそんなふうに扱われてしかるべき男ではあるのですが、それにしても「ぼく」の態度は、薄情でいい加減だと言わざるを得ません。それに「ぼく」がジゼッラに魅かれるのも、彼女が他の姉妹より華奢で色が白く、その腕に男の背骨を砕きそうなたくましさが無いせいなのです。作者はたったそれだけの理由しか与えていません。そして、「ぼく」の眼は、結局、きわめて肉体的な嗜好の眼であるに過ぎないのです。これはその本質において、タリーノが妹ジゼッラに対してした汚れた行為となんら変わりがない愛です。

「相手がジゼッラなら、もちろん、うまく行くだろう。麻の袋と絹のクッションほども差はある。彼女なら水着をきせても似合うだろう。彼女の方からぼくを迎え入れてくれたのだ。ぼくは思い続ける。ひとの身体は好みがあって、口に出さなくてもそれはわかる」

「ジゼッラは牝牛の下に手桶を置き、すぐに乳をしぼりはじめる。彼女は乳首をまるで自分の

もののように動かした。そうやってかがんでいる彼女を見ていると、抑えがたい欲望が湧いてきた」

とはいえ、私はここで「ぼく」に対して道徳的な批判がしたいのではありません。私はただ「ぼく」が真実の意味で、他人の運命に関与してゆく人間ではないことを言いたいだけです。「(タリーノの家の) 犬がぼくをなめようとするからには、ぼくもこの家の一員になってしまったのだ」などと言ってみたりはするのですが、「ぼく」はタリーノたちをふくめて、モンティチェッロの人々を外側から眺めているだけのよそ者なのです。つまり、傍観者です。「ぼく」は、見る、だけの人間です。小説の中では、「眼」としての存在でしかないのです。これが作者であるパヴェーゼが「ぼく」に与えている主人公としての性格です。それはヴィンヴェルラ老人などと較べてみますと、はなはだ影の薄い性格に思えます。ヴィンヴェルラ老人は、惨劇の直後にもかかわらず、明日の麦の脱穀を心配するのです。

「『ヴィンヴェルラ。これから、どうするつもりだい?』

ヴィンヴェルラはぼくに言う。『いや、脱穀がすんでいないぞ。明日は仕事にかかろう』

老人はぼくの方を見もしなかった。そして遠くの物音に聞き耳をたて、地面を凝視し続けた。明日は機械をすえつける。それが彼にとっては福音なのだ」

彼はまたそのあとで、「一杯飲みなされ、そして眠ることだ。明日は疲れるから」とも言います。まさに戦慄的な生活感覚です。世の中を実際に支え、動かしていくのは「ぼく」ではなくヴィンヴェルラのような老人であるのかも知れませんし、アデーレやミリオータ、そして彼女たちの母親である老婆もその同類だと言えるかも知れません。しかしながら、実のところパヴェーゼは、彼等と比較してこの影の薄い「ぼく」の傍観者的性格にこそ、非常に強い積極的

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com